

男女共同参画委員会企画

JOYFUL通信

鹿児島大学大学院整形外科 講師
佐々木 裕美

◆◆◆ 今、女性医師支援は次のステップへ

医師は、仕事では男女関係なく責任を負っています。家庭でも夫・妻、もしくは父親・母親としての責任は同じはずなのに、ジェンダーギャップの大きい日本ではまだ家事育児は『女性の問題』と思われがちです。私は長男を出産し復帰する時に、当時の上司から「整形外科医の代わりはいくらでもいるけれど、母親の代わりはいないから、あなたは子供のために仕事をセーブすべきです」と言われたことがあります。上司はただ純粋に私と子供のことを心配して言葉をかけてくれたのかもしれませんが。しかし、私はそれまでの整形外科医としてのすべてを否定されたようで大変悲しく、その時初めて自分が女医であることを後悔しました。その時の悔しさが今まで仕事を継続する力になっています。

確かに、女性が出産時に一時的に仕事から離れることは仕方のないことだと思います。しかし、「家事や育児で第一線から離れてしまう」ことは、「女性だから」生じていることではなく、「家事や育児を担う

人が働きにくい」という社会環境がもたらしている問題だと考えています。最近やっと女性の働き方に対する問題がクローズアップされ、女性医師支援やキャリアアップ支援など、様々な取り組みが始まっています。ですが、女性を支援するだけでは、女性の負担が増え、苦しくなっていくだけなのではないかとも感じています。仕事でのキャリアアップも、家事も育児もすべてを完璧にこなせるスーパーウーマンなどいないのです。様々な女性支援の体制が整った今、次に必要なのは男女ともに仕事、家事育児に対する意識改革ではないでしょうか。仕事でのキャリアアップも、家事育児も女性だけの問題ではなく、男女共通の問題として男性も同じように取り組める北欧諸国のような社会が理想ですが、日本はまだまだ時間がかかりそうです。

2022年に日本整形外科学会男女共同参画委員会働き方改革委員会のキャリア支援に「育休・産後パパ育休制度について」という項目が追加されました。個人的には、女

性支援の次の段階、つまり男性に仕事、家事育児は男女共通の問題なのだと認識してもらうために推し進められている制度なのではないかと思っています。乳飲み子と1日中家で過ごした後久しぶりに大人と会話をしたときのうれしさや、毎日当直をしているような寝不足の日々、何一つ自分のプラン通り行動できない苛立ちなど、男性のみなさんにも経験して欲しいことがたくさんあります。そのような経験を通して、家事育児が男女共通の問題として認識していけるようになるのではないのでしょうか。

私も責任のある立場になり若い医師たちと接することが増え、若い世代の仕事、家事育児に対する意識の変化を感じるが多々あります。今、意識を変えなくてはならないのは管理職である40代以降の私たちです。ここ2・3年の間に、鹿児島大学整形外科で育休第1号を取得してくれる男性医師はいないかと、日々候補者を探している毎日です。